認定医ケースプレゼンテーション抄録

上顎前歯部先天性欠如を伴う歯間離開症例に対する ラミネートベニア修復

赤川 将

Laminate Veneer Restoration for Diastema with Congenitally Missing Upper Anterior Tooth

Susumu Akagawa

I. 症例の概要

患者: 24 歳 (初診時), 女性.

補綴科初診: 平成 5 年 1 月.

主訴: 上顎前歯部の歯間離開が気になる.

既往歴: 特記事項なし.

家族歴: 特記事項なし.

現病歴: 20 歳頃より上顎前歯部の歯間離開を気にしていたが, 説明を受けた歯間修復法では, 多量の歯質が削除されると聞いて放置していた.

現症: 2|2 先天性欠如による 3|1|13 部の歯間離開 (図 1).

II. 診断と治療方針

先天性欠如による上顎前歯部の歯間離開症例に対しては, 従来全部被覆冠を用いて修復することが多かった. しかし, 歯質の削除量が多くなってしまうという欠点がある. そこで今回は, ラミネートベニア修復にて歯間離開の改善を行った. ラミネートベニアの形成はエナメル質内に局限しており, 形成量は 0.3~0.8 mm 程度と非常に少なく, そのため透明度が高く, 審美性に優れているという利点がある^{1,2)}.

III. 治療内容

患者の主訴は 3|1|13 間の歯間離開にあり, 口唇の状態と歯列関係から, C 3|間および3|4間の歯間離開は審美的に問題がないと判断し, 前歯部の審美性の回復および 3|1|13 間の歯間離開部の隣接面コンタクトの回復を目的とし, 3|1|13 に対して平成 5 年 5 月にラミネートベニア修復を行った. 本症例は変色歯ではないことから, 透明感があり審美的にすぐれたキャストブル・セラミックスを選択した. キャスタブル・セラミックスには, オリンパス・キャストブル・セラミックス (OCC) を使用した. また, 接着にはポーセライト・デュアルキュアセメント (Kerr) を使用した.

本症例の 3|1|13 は, 審美的な要求が高いため 2|1|12 の形態として, 歯間離開部はラミネートベニアにて隣接面コンタクトを回復した (図 2, 3).

図 1 Intraoral condition at the time of first visit of patient
初診時口腔内

図 2 Tooth preparation
支台歯形成

図 4 Fracture of mesio-proximal part of laminate veneer crown (At the time of 4 years and 5 months passage)
1) ラミネートベニアの近心隣接面部の破折 (4 年 5 カ月経過時)

図 3 Cementing of laminate veneer crown
ラミネートベニア装着後

図 5 Cementation of laminate veneer crown
1) ラミネートベニア装着

IV. 経過観察と考察

患者の主訴である歯間離開が改善し、審美的要求も満たされ、経過は非常に良好であった。

平成 9 年 10 月 (装着後 4 年 5 カ月経過) に 1) の近心隣接面部が破折した (図 4)。ただちに同部の修復物を除去後、キャストابل・セラミックスによるラミネートベニアにて再修復を行った。今回の接着にはクラパールボンディングキット (クラレ) を使用した (図 5)。

歯間離開があり隣接面コンタクトをラミネートベニアで回復したため、ラミネートベニアの一部が咬合誘導面となっていた。そのためラミネートベニアの一部に過度な咬合負担がかかってしまい、破折を起こしたものと推察され

た。本症例に対してラミネートベニア修復の選択は最適であったと考えるが、歯冠形態から接着面積が不足するため、可能な限り咬合負担をさけた形態を考慮すべきである。誘導歯のラミネートベニア修復は、ラミネートベニアの部分で過度に咬合誘導しないように、十分な術前の診査と咬合調整が必要であると考えられる。

文 献

- 1) 佐藤友彦, 古賀和憲. キャスタブル・セラミックス応用の審美的歯冠修復, 東京: クインテッセンス出版, 1994.
- 2) 横塚繁雄, 高橋英登, 三善由高. カラーアトラス ポーセレン・ラミネート・ベニア・テクニック, 東京: 医歯薬出版, 1993.